

第4章 ビッグドラゴンフライ

エネルギーを遮断せよ

大統領はやっと訪れたささやかな睡眠を執務室でとっていました。むろんスーツのままで靴すら脱ぐのを忘れています。いい夢を見ているようです

【なんてすてきなところなんだ】

昔自分が大統領になる前にいた幼少時代の風景を夢見していました。大統領は生まれは外国です。海に囲まれた島国で生まれました。海から少し離れた丘に住居があり、親は海辺の町で働いていました。小さいながらも畑があり、よく両親を手伝って農作業の手伝いをしたものでした。

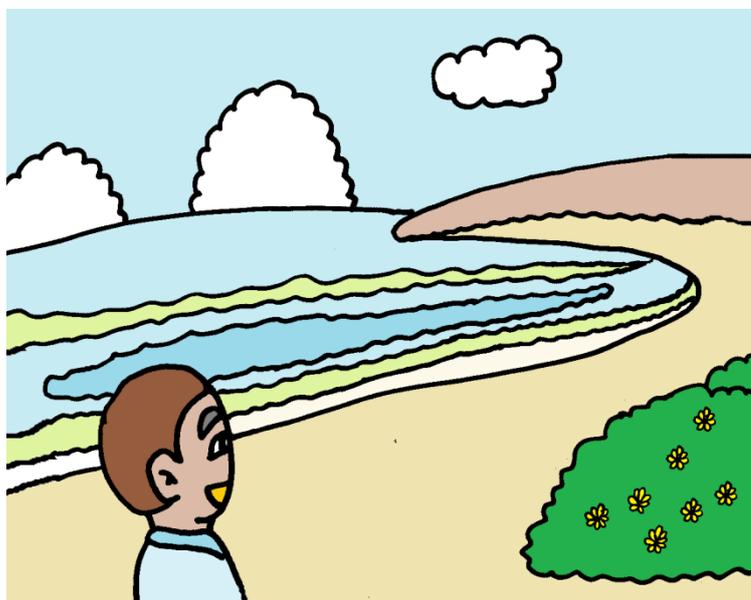
【広い海だなあ】

大統領は浜辺に立っていました。

【どうしてあんなところに発電所があるんだろう？】

左の方に遠く発電所が見えます。その時でした。晴れた青い空から大きな光る火の玉が、その発電所に向かっていきます。

【あっ、あぶないぞ。落ちたら大変だ】



【大統領、大統領、聞こえますか？・・・エイミーです】

大統領はハッと目をさまし、椅子に座ったまま眠っていた自分に気がつきました。

【エイミーがいるのか？】

エイミーはここにはいません。国立病院でこころの木を教えているからです。

【夢か？】

大統領は少し汗をかいたようで、ハンカチで額をぬぐいました。その時またエイミーの声が聞こえました。

【大統領・・・エイミーです】

【だれ？・・・エ、エイミー？】

そうです。こころの木を通じて大統領に語りかけています。こころの木が大統領の執務机の上で光りながら、大統領にささやきかけています。

【すぐエイミーに電話だ】

そういつて緊急用の携帯電話で、エイミーに電話をかけました。

「ハロー、わたしだ。大統領だ」

「ええ、こちらエイミーです」

「こころの木でわたしを呼んだんだね」

「そうです。その方がより確実に連絡ができますからね」



エイミーは少し笑みをこめたようないい方で、大統領に言いました。

「今、夢を見たんだが発電所が危ない夢だった。何か関係があるのかね」

「あたいの夢の中に恐ろしい場面が出てきたので電話したんです」

エイミーはトミーの本にも自分の夢にも現れた飛行機よりも大きなデビルビーの好きそうなものが何か気になっていました。

「トミーの本には、反スピリアンに包まれたデビルビーは殆ど消滅するが、残るものがあるとのこと。速度の落ちたデビルビーがやっかいです」

「というと」

「エネルギーを失ったバグズは、速度が落ちています。それをデビルビーが助けているというのです」

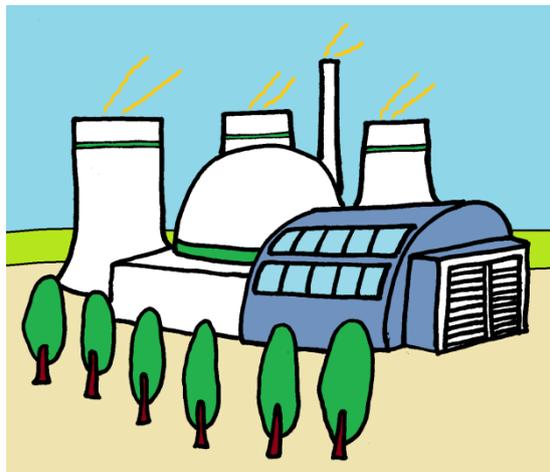
「な、なんと……。トミーの本やエイミーの夢に出てきたのかね？こころの木があるから自分の夢も同じものなのか？」

大統領は夢の光景が、不安となって頭の中をよぎりました。

「エイミー、今、アイムシュタイン博士から、いや所長から連絡があったようだ。また後で……」

そう言って大統領はアイムシュタインと電話を切り替えました。

「詳しく聞きたいのですが……」



「ミツバチは集団で助け合いながら生活するのでのお」

「その結果、なにが予想されますかな？」

「おそらくミツバチの習性で地上の花を捜しに行くと思うのじゃよ」

「花とは何ですかね？いやな予感がするが・・・」

「後はさっきおたくの補佐官と話をしておったからのお。彼に聞いてくれた方がいいかのお」

そう言ってアイムシュタイン所長との電話は終わりました。すぐに補佐官が執務室に入ってきました。

「で、その所長と話していた花はなんなのかね？」

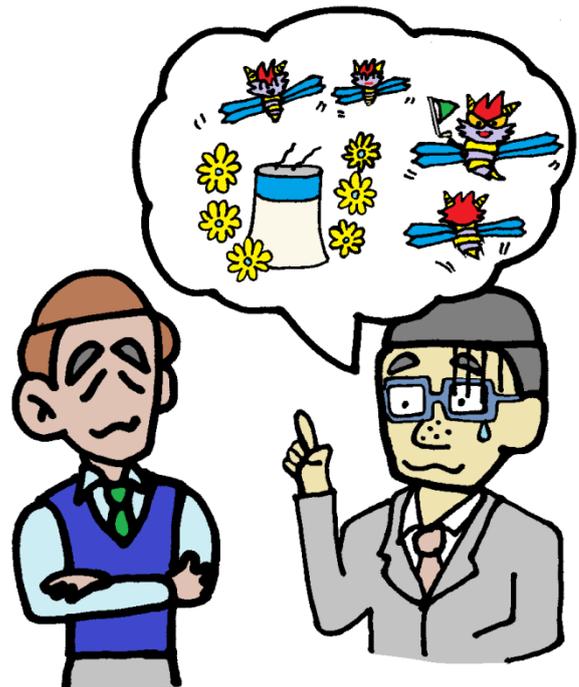
「はっ、巨大なエネルギー源です」

「それはなにかね？」

「おそらく、大きなエネルギーを
発するところかと・・・」

「そんなことはわかってるが、と
すると、発電所とかかね？つまり
地上のお花畑は発電所というこ
とかね？」

「はっ、お察しの通りです。デビ
ルビーの一番の好物は効率の良い
エネルギー、つまり電気です。
それをミツバチの習性で探し出
し行動すると博士は言うのです」



「所長だろ・・・冷静になろう。まあいい。それではどう対処すればいいのだろうか？」

大統領はたずねました。

「発電エネルギーを止めれば簡単なのですが」

「発電を止めるということか？」

「15%の削減どころか 100%の発電所の停止か・・・？」

大統領はこころの木を目の前に、じっと考え込んでしまいました。

閃光が落下する

「まるで大きなロケット花火を見ているようです。昼間でも地上から 10 万メートルも上空のそのようすがよくわかります」

いくつものテレビ局が、海岸近くから数キロメートル先で行われたトモダチ大作戦による、デビルビー墜落シーンをこぞって放送していました。海岸線は放送関係者の車で渋滞しています。

「この海域は現在、侵入禁止措置が取られていますが、この先の海に光が帯のようになり、まるでいくつかの流星が群をなして落下していくかのようです」

もともとは数 10 メートルもの帯だったものが消滅しながら、最後は残ったスピリアンをデビルビーが身にまといながら、数千メートル上空で消えていきます。



「閃光がまた見えました。上空、そうですね、入道雲よりと同じくらいでしょうか。青い空に吸い込まれるように光の帯が消えていきます」

あるテレビ局ではインタビューも始まっています。

「地表や海面にまで到達しないのでしょうか？」

「それは何とも言えません。人工衛星と同じ理屈ですから、燃え尽きなかった部分は落下することでしょうね」



どうやらどこかの学者のようですが、人々の関心は地上に落下するかどうかに向いています。

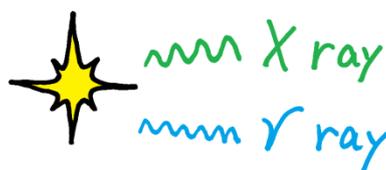
「この物体なのですが、政府はまだ飛行禁止以外の何の発表もありません。光る成分は何なのか？危険なものではないのか？地上に落下することはないのか？その点を博士に聞きたいと思います。」

「政府の公式発表がないので、あまりいい加減なことはいえませんが、危険がないとはいえないでしょうね。燃えて光っているのであれば地上では火災を起こすし、燃焼でないとすれば放射能や電磁波ですかね。危険なものもあるわけですから・・・」

「ほ、放射能・・・？・・・で、電磁波といいますと・・・？」

「放射能は危険なことは周知の事実ですが、電磁波も見える光の周波数を上げれば、X線、 γ （ガンマ）線になり、人体には危険です」

What's the
lighting objects?



インタビュアーは、少し後ずさりするようないくさしながら、さらに質問を続けました。

「現在、政府発表がないので、われわれ報道機関としては民間の会社や大学と一緒にあって、この光る物体はなにかの調査を進めています。・・・えっ、あっ、たった今ですが、別の情報が入ってきました」

生中継のテレビ画面に原稿を渡す人間が映り、インタビュアーはその原稿に目をやり話しました。

「たった今、入ってきた情報です。この近くの沿岸部の陸上にも光の破片らしきものが落下したという情報です。すぐ我々も移動します。そこからまた中継をしたいと思います」

そういつて急いで移動を始めました。他の報道機関も同様にそれを知り、みなこぞってその場所に向かっていきます。報道関係者の車列は、海沿いの国道を長い縦列になって、その場所へ向かっています。

ヘリコプター部隊は飛行禁止ではない陸上から、その近くの上空まで飛び撮影を続けています。同時に軍の関係者が、ヘリコプターから拡声器と無線で、この範囲から退去するように命令しています。

「ここで政府の緊急発表があるようです。・・・、少しお待ちください。それでは大統領府の報道官の記者会見に映像を移します」

テレビ画面は政府報道官の、記者会見会場に変わりました。

「すぐ始まりますが、画面には聴覚障害者用にテロップも流されますので、ご注意ください見て、いただきたいと思います」



放送されていた番組は、急きょ大統領の緊急会見に場面が代わりました。補佐官を使わずに、直接大統領がブリーフィングします。



「ナメリア合州国大統領のカナディです。今我が国は大変な危機を迎えています。1ヶ月ほど前に原因不明の病気の感染があり、今また戦闘機が出撃する事態にまでなっています。これは同じ原因であり、突然変異した虫が集団で、エネルギー発生源に引き寄せられることに始まります。・・・」

しばらく大統領のブリーフィングで、事態の原因と今までの対策が発表されました。そして最後にいいました。

「これから全発電所の停止の検討に入ります。時刻にして2時間以内にもう一度この席に戻ってきて、その結果をいうこととなります。全ナメリア国民にお願いいたします。我々は決してあきらめません。

必ずこの事態を乗り越え平和が来るために、どうぞあせったりむやみな心配はしないでいただきたいのです。ナメリアは永遠です」

ブリーフィングは15分ほどで終了しました。報道官が詰めかけた記者の質問に応じています。大統領は急ぎ執務室に戻って来ました。

「どうだ、その後は？2時間とってしまっただが、発電所は止められるか？」

大統領がエネルギー長官に向かっていいました。

「そ、それが、化学コンビナートにオブジェクトが落下したとの知らせです」

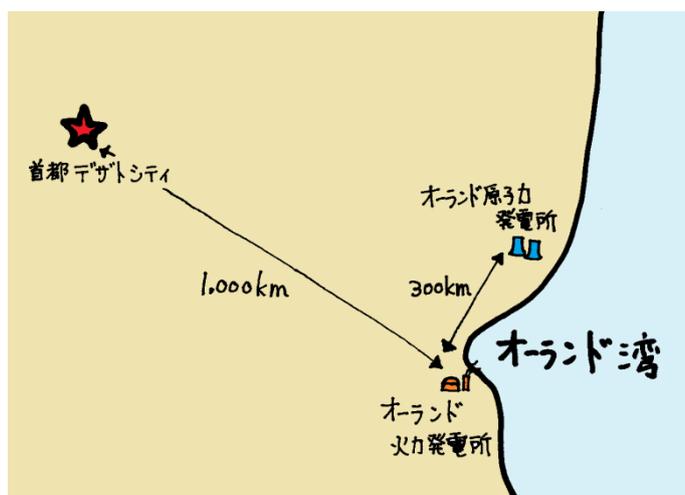
「な、なんと。それで、場所はどこだ？」

「はっ、オーランド湾のどこかということです」

「わかり次第、情報は公開せよ。発電停止の了承を得るためだ」

大統領は補佐官にいいました。この内容は確認後、記者会見会場の報道官に渡され、すぐさま放送されました。

「たった今はいった情報です。光る未確認飛行物体の陸上への落下を確認しました。半径10キロメートル以内には決して近づかないことを、まず念頭に申し上げておきます。落下地点はハボマ州オーランド湾の陸上と海に接したあたりです。化学コンビナートや火力発電所がありますが、それには落下していません。その外側を取り巻く農場地帯に落下した模様です……】



すぐさま別の発表がありました。

【ここで、大統領の特別命令が下りました。未確認飛行物体の落下予想区域の発電所は10時間に渡り電力供給が停止されます。これは発電そのものを停止することを意味しますが、発電所の再開には時間がかかるため、別の発電所からの電源を供給する時間を合わせ、10時間の供給停止となります】

「未確認飛行物体って何なんだ？」

「発電所がなぜ電力を停止するんだ？」

「それも発電そのものを停止するんだぜ」

記者会見会場は、報道記者や学識者もあわせて、右往左往の混迷した情報が飛び交っています。

原子力発電所の危機

その時でした。先ほどの光る物体が化学コンビナートの方向に伸びていきます。軍のヘリコプターからの緊急連絡が入ります。

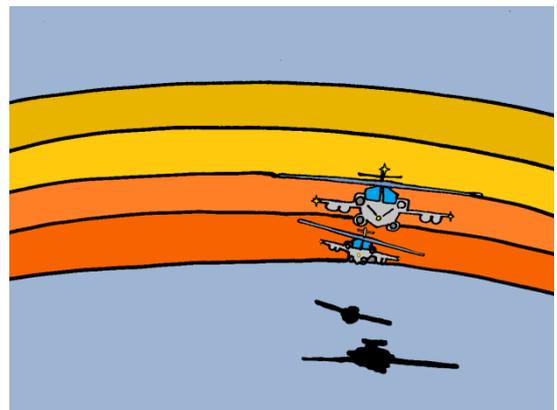
「緊急住方です。光は陸上で原子力発電所に向かうようです。まるで生き物のように陸上を、いや正確にはおそらく陸上の数メートル上を漂って移動しています」

「そりゃ生き物だからな・・・」

この内容は大統領にもすぐ伝えられました。

「原子力発電所を緊急停止せよ」

大統領は強く補佐官に命令しまし



た。その様子がようやく大統領執務室のモニターにも表示され、国防長官や関係者も見守っています。

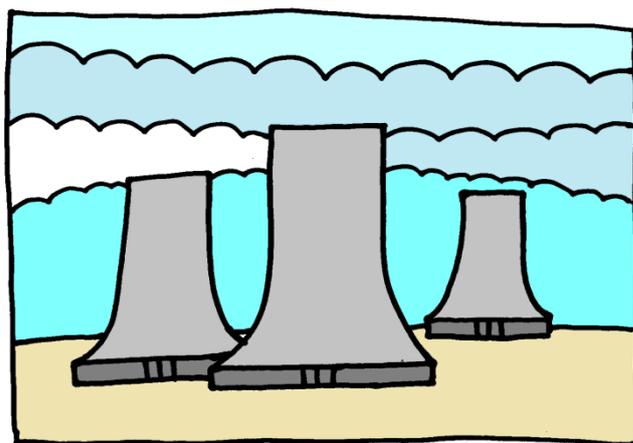
「おそろしい事態です。大きな蛇のような、いやなんといったらいいのか・・・」

ひとりの学識経験者がいいました。

「停止命令は届いたか？」

大統領が確認します。

「発電停止シーケンスがありません。すぐに停止というわけにはいきません。3日はかかるでしょう。相手は原子力なのです」



「どうすればいいんだ。爆発したらおおごとだぞ」

「はっ、し、しかし、すぐには止まりません。事態を祈るしかないでしょう」

「それはなんだ？神頼みか？」

「はっ、す、すみません」

「オーマイゴッドしかないのか？」

他の科学者もいいます。その時でした。

「火力発電所が光に包まれて行く」

執務室のディスプレイはデビルビーを示す青い雲のような光が、広がっていくようすがわかります。1秒間に1メートルくらい光が広がって行く姿がはっきりと見ることができます。突然、化学コンビナ

一トの照明やその周りの道路の信号などの電灯が消えました。まだ夕方も間もない明るい空ですが、明らかに電気が遮断されたことが分かります。それだけにその広がって行く光はまばゆいばかりに、遠くからはっきりと見ることができます。

「緊急避難だ！これより10キロメートル離れよ！繰り返す！これより10キロメートル離れよ！」

政府関係者の軍のヘリコプターが低空飛行で旋回しながら、拡声器の音量を最大限にして大統領命令を発しています。



「早く離れよ！繰り返す！早く離れよ！どんな危険があるかわからない！早く離れよ！」

以下報道陣のいる埠頭も立ち入りは禁止されています。しかし報道のため一斉にコンビナートから2キロメートルほど離れた対岸に、みなは詰めかけていました。

「おい、非難するぞ」

ある報道関係の記者が同僚に、せきたてるようにいいました。

「しかし絶好の撮影ポジションなんだがなあ。スクープが狙えるかもしれないし・・・」

同僚の記者は少し残念そうですが、目の前の光はどんどんと大きく広がって行きます。

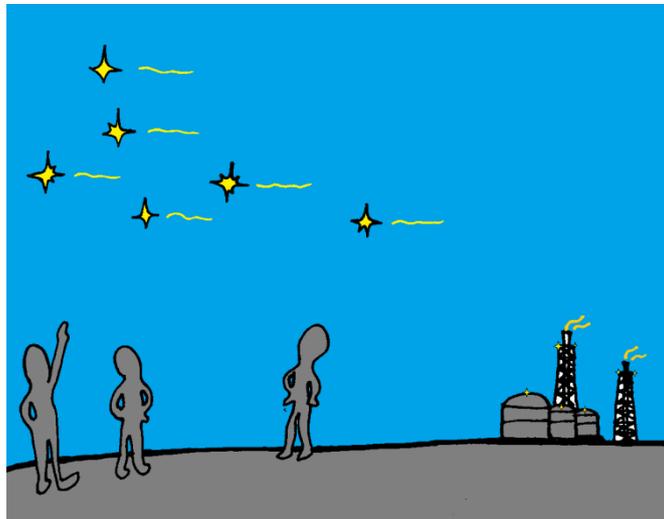
「死んでしまったらスクープもあったもんじゃないぞ。さ、行くぞ！」

「そうだな。避難するか」

「見ろ、もうあんなに大きくなっている。写真だけでも撮っておくか・・・？」

「さ、車に乗るぞ」

埠頭にいた関係者は一斉にその場を離れました。空からは軍のヘリコプターが周辺に人影がないか確認しながら、拡声器で避難を呼び掛けています。



火力発電所に隣接する化学コンビナートやその周辺の工場、港に至るまで季節の電灯には光がともっていません。それでも火力発電所に広がる光はさらに大きく全体を包んでいます。その光は周辺を照らし、まるでそこだけがレジャーランドのような趣をかもし出しているようです。

「友軍機もこれで全機2キロメートルまで退却します」

国防長官が大統領にいいました。

「火力発電所の状況は？」

大統領がたずねました。

「タービンは既に停止していますが、最終的な起動停止にはまだ数時間かかります。それと自家発電のための二次電池、つまり電氣的に蓄えられた電池はすぐ放電できません。この火力発電所の主要機器を5時間運転保持できる設計になっているからです」

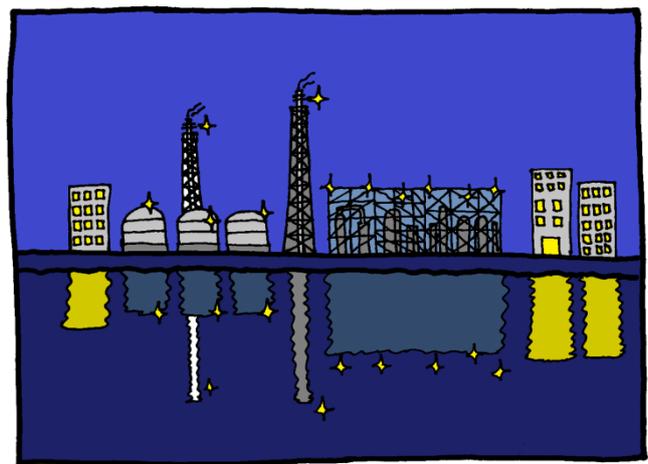
火力発電所のエンジニアから報告を受け補佐官が言いました。

「このままなにもなければよいのだが・・・」

大統領は低い声で呟きました。

「クレオラネル州のボゴータル発電所、ニューサンライズ州のサンセット発電所・・・」

海辺で作戦が完了したいくつかの発電所は、発電停止に陥っています。幸いなことに残った他の発電所の近くでは、デビルビーの落下は見られませんでした。作戦範囲100キロメートル以内の原子力発電所では、緊急対策として起動停止措置が実行されました。火力発電所と違い起動停止に数日を要するため、周辺には反スピリアンを搭載したヘリコプターが数機、待機しているようです。



こころの木が人々をつなぐ

合衆国で約60基の火力発電所が起動停止しました。全出力6千万キロワット、供給する大都市、中小の都市、町や村の約5千万人に

及ぶ影響が出ています。これはナメリア合衆国の人口の5分の1にあたる人々です。

稼働している発電所からの送電も送電網を切り替えながら行っていますが、全使用電力を賄うことはできません。主要な工場は稼働を停止し、社会生活に必要な交通制御系や、交通機関にぎりぎりの送電が行われています。

「ママ、まっくらだけど・・・！でもローソクの火って、見ていると心が落ち着くね」

「まあ、この子ったら・・・一人前のことをいって・・・」

冷蔵庫や最低限の明かり以外は皆、節電に努めています。病院も例外ではありません。

緊急手術用に必要な電源以外の廊下や病室の明かりも消され、エレベータの運転も制限されています。

通信手段もその基地局が節電しているため、電話はかかりにくくなっています。テレビ各局はラジオでのニュース配信に切り替え、テレビの表示には【節電中です。ラジオのニュースをご覧ください】と表示されています。

「大変なことになってきたわね」

エイミーがつぶやきました。デザト・シティ国立病院で各地から来た病院チームに、こころの木の話し方を教えています。エイミー、バーバラ、トミーはほんの少しの食事の休憩に一緒に集まっていました。彼らがここにきてもう5日が経とうとしていた夕刻の時です。



「もぐもぐ、まさかねえ、もぐもぐ、たった小さな虫に戦闘機もやられちゃうんだぜ、もぐもぐ・・・」

トミーが夕食のパンを口に押し込みながら話しました。

「あんたねえ、食べてからものいうか、いってから食べなさいよ」



バーバラはあいかわらずお姉さん役でトミーにいいました。そこへサーヤが飛んできました。

『トミーすぐに来てほしいサーヤ!』

「ど、どうしたのさ、もぐもぐ・・・」

『外にブルーシルバーが待ってるから早く早く・・・』

「ん、なこといっても、もぐもぐ、すぐにまたこころの木で治療しなくちゃなんないんだぜ、もぐもぐ、おいら、少しは食事もしないと・・・」

「ったく、あんたってのは、男のくせにごちゃごちゃと。早く行きなさいよ!」



トミーはサーヤに引っ張られて急いで外に出て行きました。

「まあ、いいじゃない。でもこうして病院も真っ暗で、ローソクの炎も火事になったら大変だし・・・」

エイミーは食が進まないのかフォークを置いてバーバラとトミーの会話にも顔を向けず、食堂に灯されたローソクの光りを見ながらいいました。

「そうねえ、わたしたちにできることっていっても、こうしてこころの木を教えることだけだし・・・」

バーバラもなんか力なくつぶやきました。

「こ、こころの木・・・こころの木か・・・そうだわ、こころの木よっ！」

突然、エイミーが小躍りをしたように椅子から立って叫びました。

「こころの木？」

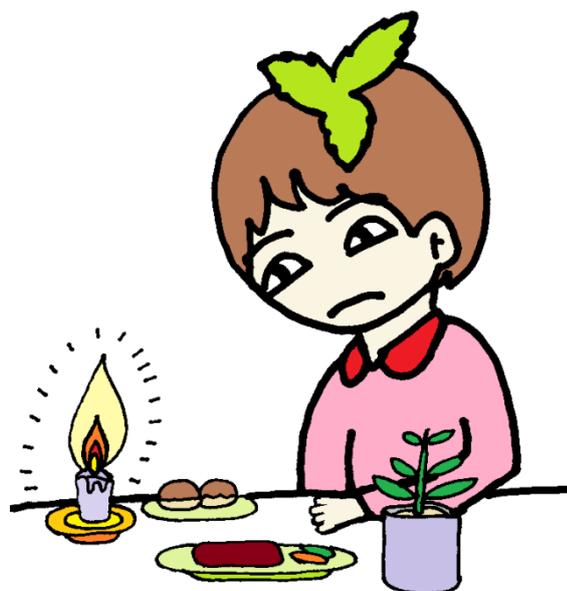
バーバラは再びエイミーの方を見ました。

「そう、こころの木にお願いするのよ」

「なにを？」

「こころの木さん、お願い光ってみんなを明るくしてくださいって、・・・」

エイミーはバーバラとトミーに顔を近づけて、真剣な顔でいいました。



「そうか・・・こころの木でかぁ・・・」

バーバラが納得したように首を縦に振りました。

「やってみる？」

トミーがいなくなって持ち場に帰った2人は、患者さんや病院チームに言いました。

「みんなでこころをひとつにして、こころの木さんに【光ってください】とお願いしてください」

「そうか！こころの木は光ることもできるんだ！」



患者の中から声が聞こえました。

「さぁ、こころの木さん・・・光って・・・お願い・・・」

「こころの木さん・・・光ってください・・・」

「こころの木さん・・・お願いします。光ってください・・・」

みんな、こころの木に向かって光ってくれるようお願いしています。起きあがれなかったような重篤な患者でさえベッドから起き上がり、皆と一緒にこころの木にお願いを始めました。

一方大統領特別執務室では軍や学識関係者など10数名が詰めかけ、次々と入ってくる情報の処理に奔走していました。大型のディスプレイが数台設置され、まだ作戦中の舞台の様子、デビルビーの消滅の様子、発電所の被災状況などが刻々と表示されています。

「作戦はほぼこれで最後と思われます」

国防長官が大統領によっていいました。

「ほぼかね？最後なのかね？」

大統領もさすがにいらだちを隠せません。

「はっ、さ、最後と思い・・・いや、最後です。これで作戦は終了となります。最後に反スピリアンをヘリコプターで散布するため、オーランド原子力に集めています。」

国防長官は隣で連絡を中継している副参謀長の顔を見ながらいいました。

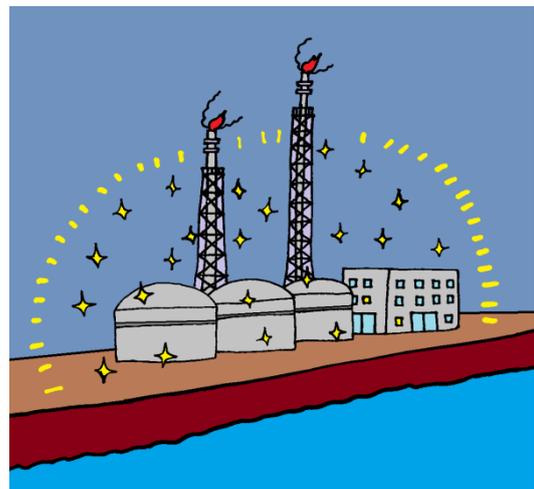
「すまん、わたしが大きい声を上げることもなかった・・・」

大統領はいいました。

「と、とんでもありません。正確な情報があいまいになり、申し訳ありませんでした」

国防長官も答えました。

「それにしてもこのコンビナート上空の光はどうだ！まったくおさまっていないな？」



大統領はそばにいた上級エンジニアにたずねました。

「ハッ、正直言って何も科学データがありません。ただ外部からの間接計測では熱は発生しておらず、放射能などの危険物質も確認されていません」

「されて欲しくないし、あつてはならん・・・」

大統領はボソっとつぶやきました。その時情報を持った補佐官が入ってきて、大統領にそれを連絡しました。

「光の影響で有線電話ですら中と連絡が取れませんが、数名が連絡のために脱出を試みるというモールス信号をヘリコプターがキャッチしたようです」

「そ、そうか！無事を祈りたいな」

大統領も答えました。

「ヘリコプターによる散布もききめがないのでしょうか・・・？それにしてもこれで5時間も光に包まれていますね」

補佐官がいました。

「少しの間だが、一人にしてもらっていいかな？」

大統領がいました。

「ハハッ、どうそ少しお休みください。後はわれわれが・・・」

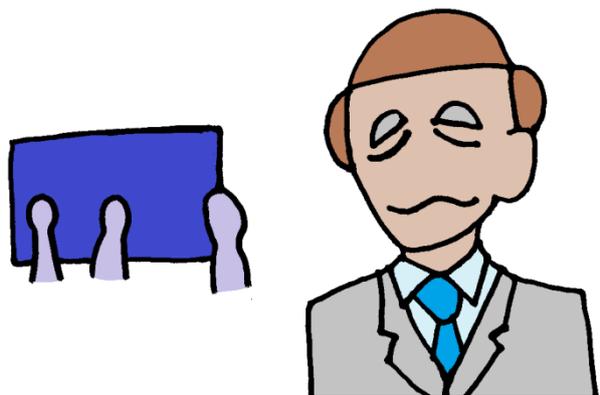
国防長官の言葉を遮り、大統領がいました。

「いや、そうじゃないんだ。少し連絡したいところがある」

「それでは、この緊急無線で・・・」

「いや、それではダメなんだ。ほんの少しだけ中座する」

とって大統領は特別執務室を出て、本来の自分の執務室にもどって行きました。



別れの時

「おお、これはいったい・・・？」

大統領は薄暗くなった自分の部屋の机の上におかれた、こころの木が少し光っているのに気がつきました。

「きみは、どうして光っているのかな？・・・あっ、いや・・・」

もう一度椅子に座って深呼吸をしていいました。

【あなたは、どうして光っているのですか？】

大統領は幾度となく同じことを訪ねました。

【・・・エイミーたちが病院からお祈りをしています。それにわたしも同期して、こうして光を放っています】

「おお、なんてことだ・・・。
す、すばらしい・・・」



光はだんだん大きくなり大統領の顔すらはっきりとわかるまでになり、また少し暗くなったりを不定期に繰り返しています。

【今からわたしたちが、デビルビーをもと来たねぐらに誘導します。決して発電所に危険なものではありません。患者たちも回復に向かうでしょう】

誰かにそういわれたような気がして大統領は椅子から立ち上がり、部屋を出ていこうとしました。ドアを開けてふりむくとこころの木は白い光から青い光に変わり、明るくなったり少し暗くなったりして、なにかと話しているようにも見えます。

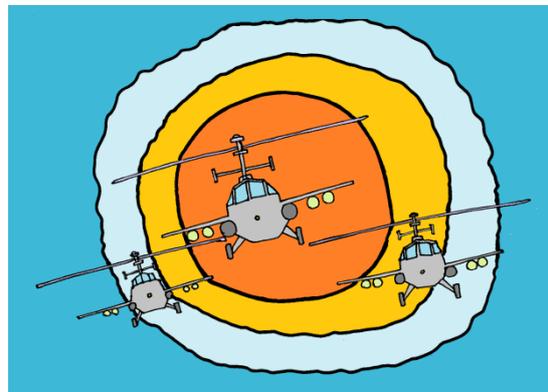
【あ、ありがとう・・・】

大統領はそう心の中で呟いて、部屋を出て前の特別執務室にもどってきました。

「国防長官、様子はどうかね？」

「はっ、空の上のデビル野郎はほぼ全滅と思われます」

「速度が落ちた野郎どもを今ヘリコプターが叩いています。軍隊が農薬散布とは時代が変わったのですかね」



参謀総長は特別無線を使い、全ヘリコプターを集結させ散布の状況をリアルタイムに確認しています。大統領はしばらくデビルビーのモニターを見ていましたが、また別室に戻って行きました。

デザト・シティ国立病院では、エイミー、バーバラと、トナとデコの2人のフレンズ、病院チームそして歩くことができる患者までもがいくつもの大きな輪になり、その輪の中にみんなのこころの木をたくさん置いてお話をしています。

エイミーはそんな中で、ふと自分を生んでくれた母親のことを思っていました。

【こころの木さん、わたしのお母さんはどこにいるの？どこかで生きているのかしら？】

【この惑星のどこかでくらしているよ】

エイミーにはこころの木がそう
いった気がしました。そしてこ
ころの木はこう呼び掛けています。

【みんな人も虫も動物も、この生
まれた星で生きているんだよ。だ
れかが勝手なことをしたらみんな
星ごとなくなっちゃうよ。みんな
生まれた世界にもどって行こうよ】



話しているみんなには、こころの
木がそんなことをいっている気がしました。我々生命は何万年もか
けて変化してきました。ゆっくりゆっくと、時には絶滅を繰り返
して尚今こうして惑星上で生きています。このゆっくりとした変化
が重要なのでしょうか。生命には節理があるようです。それは「急
激な拡大はそうさせた理由で、最後は急激に縮小する」というもの
です。

【ゆっくり生きて行こうよ】そんなことを言われたような気がしま
した。こころの木はあちこちで一斉に光り出しました。するとどう
でしょう。バーバラの書いた絵もいっしょに光っています。

「同期したのかしら」

バーバラも自分のス
ケッチブックを見て驚
いています。

「こころの木が足りな
いようだ」

病院長がエイミーの
ところにやってきて言



いました。

「どうすればいいの？」

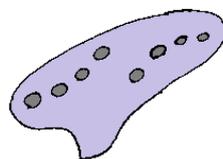
『あわてないで』

トナが言いました。

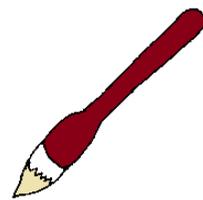
『こんな時のためにあなたたちが練習したんじゃない？』

デコがエイミーのかたわらにおかれた笛とバーバラのスケッチブックを指さして言いました。

「笛が？」



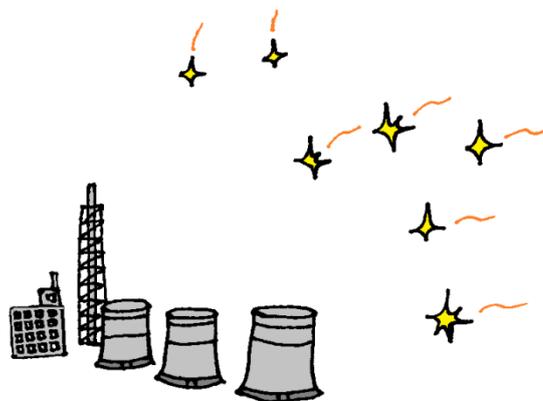
「筆が？」



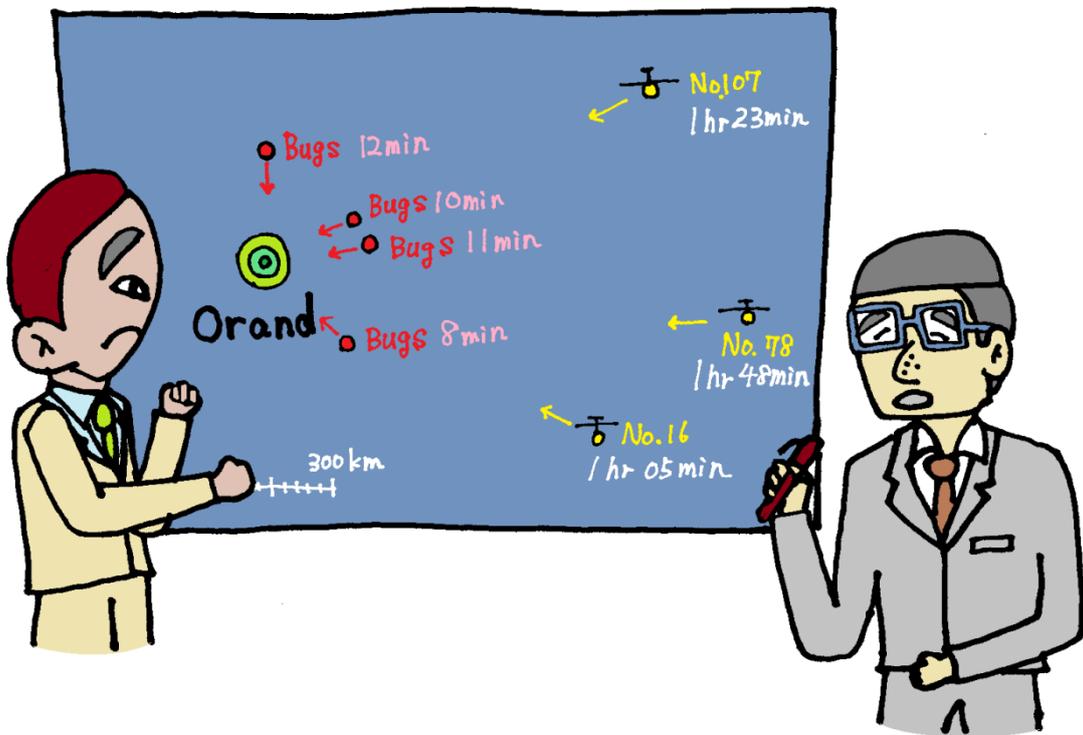
エイミーは笛を手に取り、演奏を始めました。バーバラはこころの木をスケッチブックに書いて木を持っていない患者に渡して行きます。するとその絵の中のこころの木は光り始め、患者の心をいやしているようです。

今このヒューマニーワールドで、短期間に発展した文明への警鐘なのでしょうか？エネルギーの増大がさらに国を発展させ、豊かになったかに思えた世界で、今度はそのエネルギーが原因で、大きな危機を迎えてしまったのです。

オーランドコンビナート上空ではヘリコプターがまだ旋回しています。その時 300km ほど離れたオーランド第1原子力発電所に光が迫っていました。執務室のディスプレイは全ナメリアの状況を映し出しています。



「だ、大統領、既に手は打ちつくしました」



参謀総長と国防長官も大統領と補佐官の前でモニターを見ています。

「ヘリコプターの速度では追いつきません」

参謀総長がうなだれながら残念そうに言いました。

「あと一步というところなのですが・・・」

国防長官が言いました。

「出尽くしたか・・・？」

「ハッ、ざ、残念ですが・・・」

その時、別室の机の上のこころの木がぼっぼっと光り始めました。

「だ、大統領、あ、あれを」

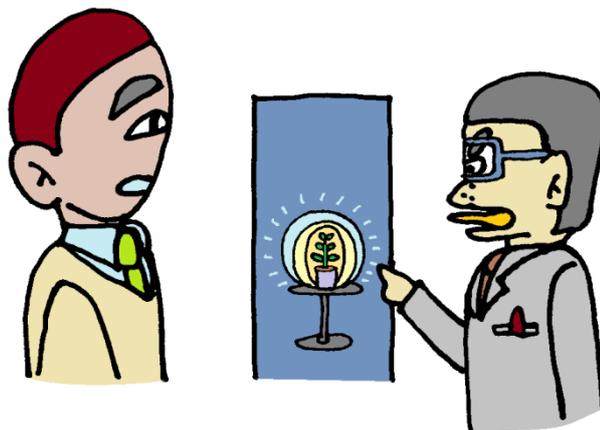
国防長官が、光っているところの木を指さしました。

【あきらめちゃだめですよ】

【エイミーか・・・？】

「そうだ！あきらめるな！
おい、原子力発電所の停止
はまだか？」

大統領は急いで執務室に
戻り、エネルギー長官に問
いました。



「命令は既に行っています。
ただ急に原子力エネルギーは止めることができません。これに影響
するかどうかは、科学者でも判断ができません」

「八方ふさがりか？」

大統領は真っ赤になった目をこすってつぶやきました。国務長官も
参謀総長も出す声がありませんでした。飛行能力が落ちたとはいえ
元々マッハを越えて飛ぶミツバチです。ヘリコプターの速度を凌ぐ
時速 500 キロメートルを越えてオーランド原子力発電所に向かって
います。距離にして 300 キロメートルなので 40 分もたたずに到着し
ます。

火力発電所では単に予備バッテリーに呼び寄せられたものでは
が、原子力となるとわかりません。急に冷却しエネルギーを落とす
こともできず、原子炉内に入り込み、臨界を越えて核反応が進まな
いとも限りません。

「もうだめだ。これ以上はついていけない！他の基地からでは、も
はや間に合わないぞ」

ヘリコプターの操縦士は叫びました。

「万事休すか？」

操縦士の声をモニターで聞き、大統領も胸に十字架を切りました。

【あきらめないで】

【Operation Tomodachi だろ？】

【大統領、トモダチ大作戦を思い出して！】

「だ、誰の声だ？」

大統領は、再び目をこすって我に返りました。

【故郷に帰りなさい。ここはあなたたちの住むところではないよ】

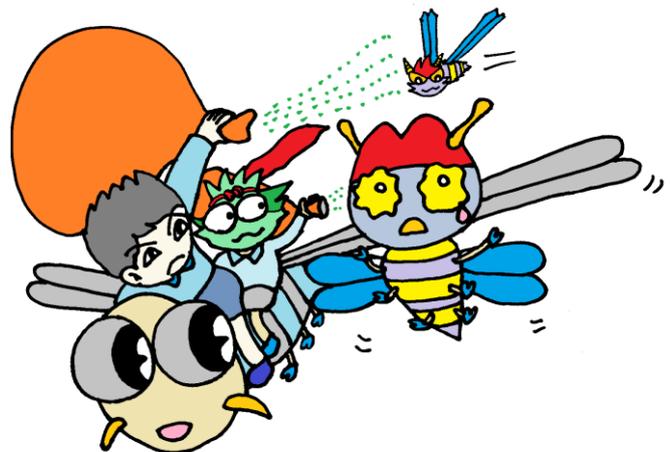
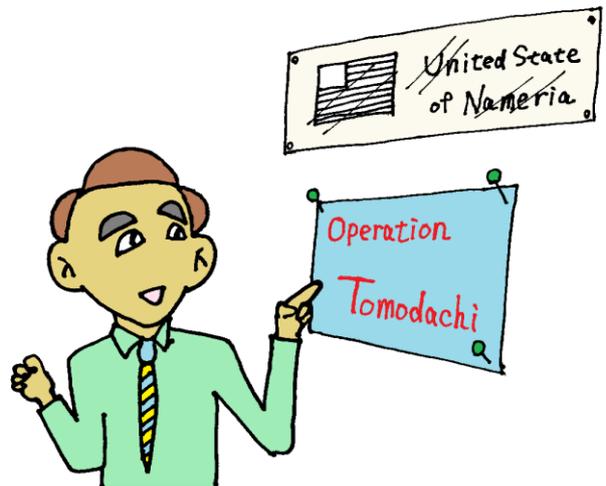
「おまったせ〜〜〜」

ヘリコプターの一団を追いかける大きな影が夕陽に照らされて、海面を波打つように走って行きました。ビッグドラゴンフライがやってきたのです。

【わたしたちはあなたのお友達だよ】

『オラッチが先頭を切ってやっつけに来た二』

クラウシアがトミーとブルーシルバーに乗って先陣を切ってやってきました。2人で反スピリアンをデビルビーに直接振りかけ



ています。 レタはスカイブルー隊長に乗って、反スピリアンをいっぱい背負っています。

『クラウシアには負けないニ』

他のフレンズも同じ大きな反スピリアンの袋を持ち、他の多くのビッグドラゴンフライにまたがっています。フレンズがビッグドラゴンフライの背中に乗り、ヘリコプターの横をあっという間にマッハのスピードで追い越していきます。

「すごい衝撃波だ！」

「あいつら生物だろ？」

【わたしたちはあなたの友だちよ】

デビルミツバチは原子炉発電所を目の前に速度を落とし、旋回を始めようとしてまし

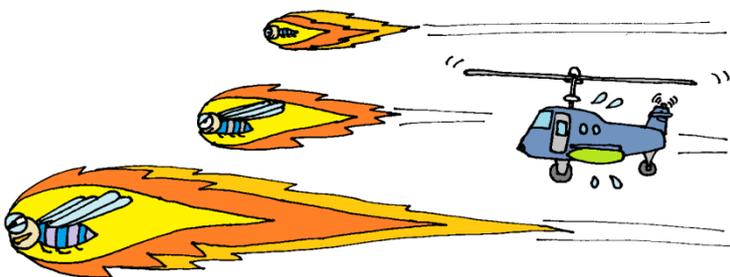
た。その時でした。フレンズの乗ったビッグドラゴンフライが10数もの集団になって取り囲み、フレンズがいきなり反スピリアンをデビルビーに振りかけました。

【にゃんにゃのら？】

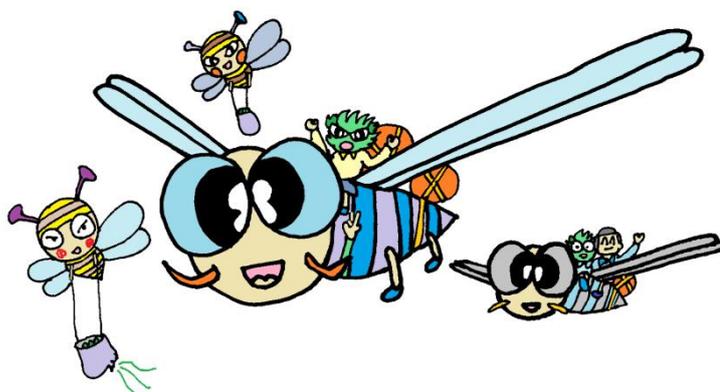
デビルビーは鋭角だったその姿が、反スピリアンによってふにゃふにゃと元のミツバチのよう

になって行きました。しかし原子力発電所はまだ光り輝いています。デビルビーがへばりついているのです。大統領らはこれをモニターで見えています。

「早くこの光がなくなるといけないのだが……」



病院ではエイミーは笛とバーバラの絵で患者さんたちの心が静かになっていきました。そこへまたサーヤがやってきて、トナも駆けつけてきました。今度はスカイブルー隊長が来ています。



『エイミー、さあ乗るのよ』

「えっ、わ、わたしがっ？」

エイミーはスカイブルー隊長の背中に乗っているトナの前にまたがりました。

「どこへいくの？」

『ここはデコとバーバラに任せて、レタを応援に行くのよ』

スカイブルー隊長は羽を広げたとおもうと一気に上空に舞い上がりました。

「レタさんのいるところはずいぶん遠いんじゃないの？」

『いいからトナのいうようにしてほしいトナ。その笛を吹いてちょうだい。バグズを次元トンネルに誘導するのよ』

「こんなんで音が聴こえるの？」

『だいじょうぶよ。彼らには聴こえるのよ』

エイミーはトナにからだを支えられながら、両手で笛を吹き始めました。



「じゃあせっかくだからあたいの作った【トナの歌】を吹いてみるわね」

そう言って笛を吹き始めました。

「なにかかわるのかしら？なにも起こらないわ」

『いいからずっと笛を吹いていてね』

スカイブルー隊長は沈んで行く太陽を追いかけるように夕陽に向かって飛んで行きます。

「なんにも変わらないなあ・・・」

「だ、大統領。カメラの映像が変化しています」

突然補佐官が叫びました。するとどうでしょうか。原子力発電所の光がところどころ黒い点のようになってきます。太陽の黒点のようです。

「た、たしかに！も、もう少しだな！フレンズ、がんばってくれ！」

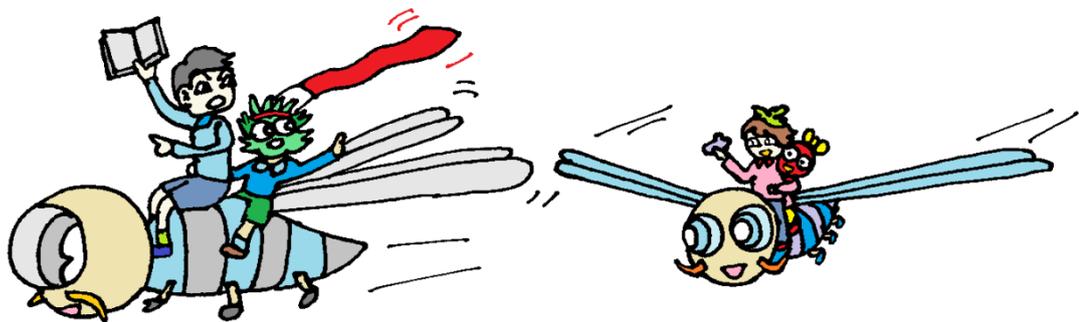
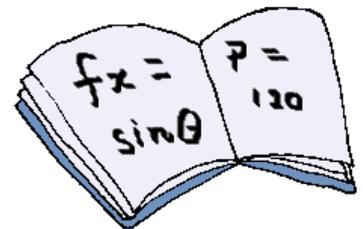
『笛の音色に引き寄せられてきたトナ』

トナが言いました。

「おーい、こっちについてきて」

「トミー、あんたまでどうしたのよ？」

「だって、エイミー、おいらの本が計算機なんだよ。おいらの計算が正しければ、こっちの方角に別の次元トンネルがあるんだ」



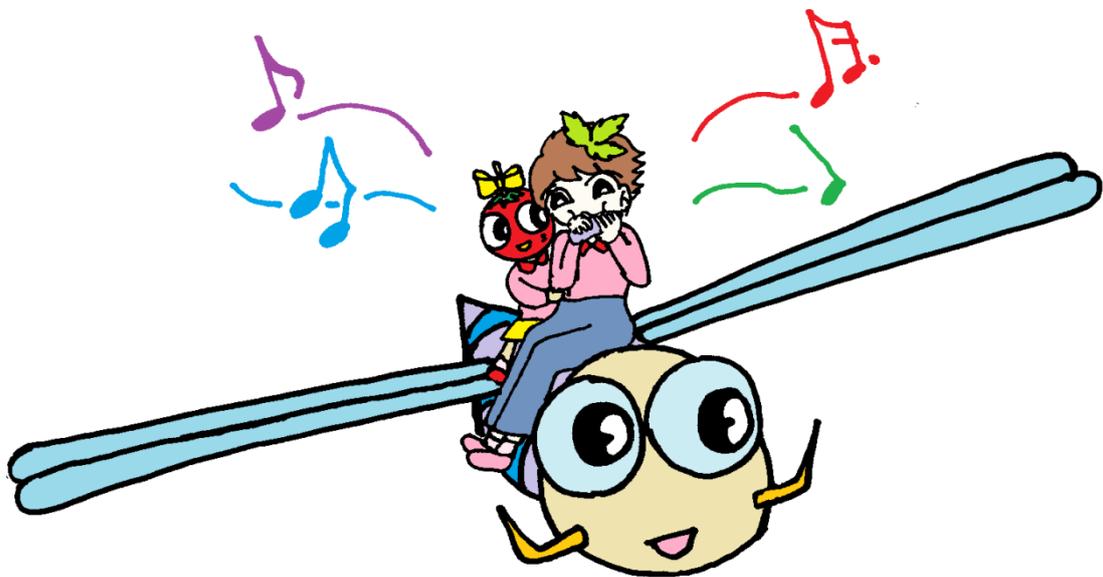
「次元トンネルがどうしたのよ」

「フレンズワールドに送り込むんだ！」

「そんなことしたらあっちが大変じゃない？」

『それでいいのよ。あっちに行けばすぐもとの姿に戻るトナ。それにミツバチの労働力が足りないし』

まだ元気のよかったデビルビーは、トミーの計算した次元トンネルにエイミーの笛で引き寄せられ消えて行きます。



【ボクたちはなにをやっていたんだろう？】

そういって残って元の姿に戻ったミツバチは、そのまま野や畑に散っていきました。残ったデビルビーはもはや方向感覚がありません。他のフレンズたちに誘導され、ゆっくりと何10匹のビッグドラゴンフライの後に付いていきます。大統領の机のころの木は、白と青い光が交互に、不規則に明るくなり、また弱くなって変化をしています。その時、大統領特別執務室のモニターが変化しました。

「だ、大統領、て、敵は、の、残り2つのグループです」

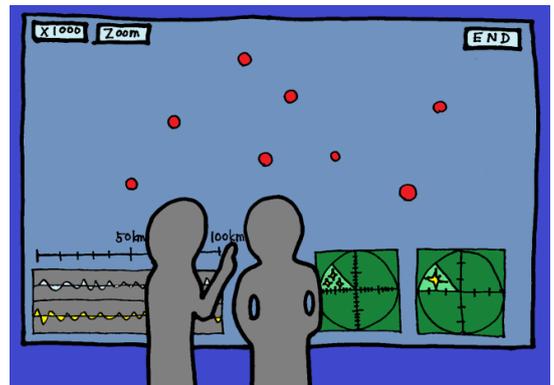
突然、補佐官が叫びました。

「おお、確かに2つだ」

国防長官もこぶしに力を入れていました。

「それと原子力はなんの異常もないようです」

「デビルビーが移動しているようです。風の流れではありません」



科学者がデビルビーのモニターを指さして説明しました。今まさにデビルビーは合衆国全体から集まり出し、いくつかの大きな集団となり、一か所に向かっているようです。そう、トミーの見つけた次元トンネルを目指して飛行しているのです。

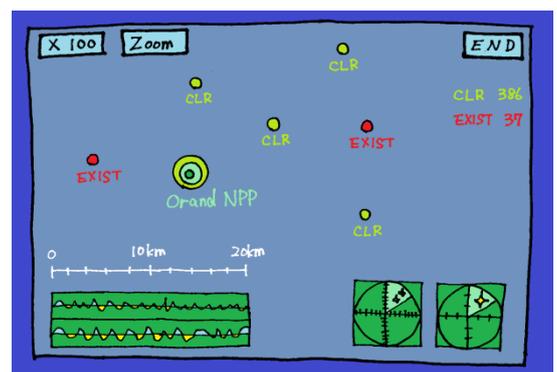
「だ、大統領、こ、これは一体・・・？」

国防長官は大統領の顔を見ていました。

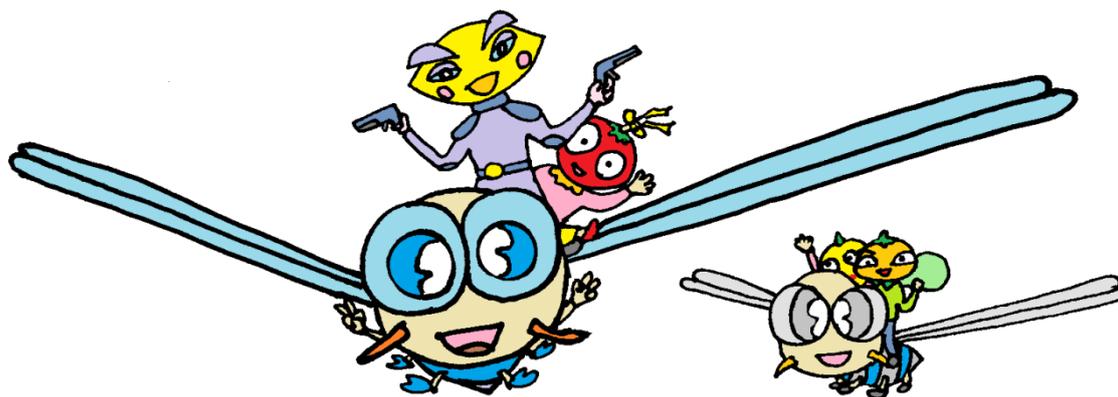
【我々にはなかった、これは秘密の第3次トモダチ作戦だな。またフレンズに助けられたな。エイミーたちにも・・・】

大統領はほっとつぶやきました。レタ、クラウシアのほかにもミツバチサーヤと他のフレンズの大活躍があったのです。こんなこともあろうかとサーヤが多くのビッグドラゴンフライを連れてきて

いたのです。フレンズたちがこれに乗り、デビルビーを誘導していたのです。フレンズはフレンズワールドで一番のビッグドラゴンフライの使い手なのです。それでもよくビッグドラゴンフライがいたものです。



実はかれらの好物は、トナトンのマインドエネルギーだけでないことがわかったのです。アトムシュタイン所長の作ったトナトンと融合させたヒューマニーワールドのトマトを食べて、ますます元気になってしまったのです。



【少し運動不足で、ちょうどいい運動だなあ～～】

ビッグドラゴンフライたちは言いました。

【わたしはあなたの友だちよ】

【サーヤありがとう。そしてフレンズたち】

トナはこころの木を通してサーヤに伝えました。

【なあと Operation Tomodachi だろ】

サーヤもトナに答えました。隣にいるデコにもそれがわかりました。サーヤは年でいえばトナより年上ですが、まだ独身なのです。おそらくレタより年上の500歳くらいかと思われます。サーヤからまた連絡が入りました。

【ところで Operation Tomodachi ってなんのこと？】

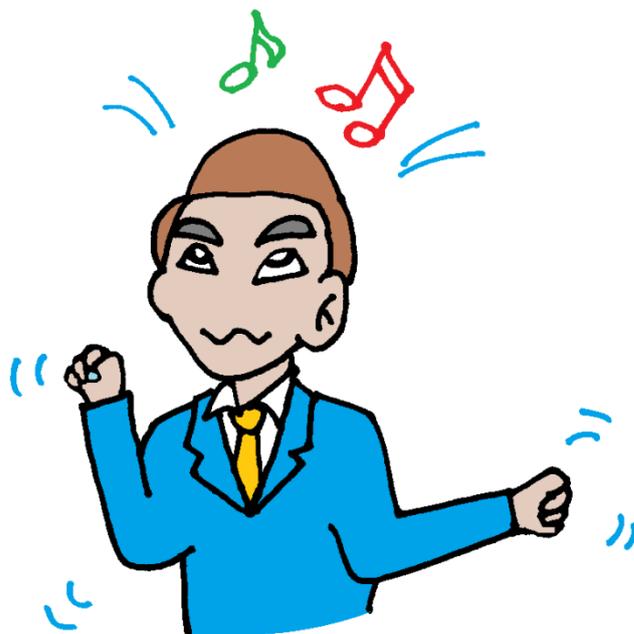
「うん、やってくれたな、エイミーたち・・・」

執務室でモニターを見ながら
両手を振って小躍りして大統領
は言いました。

「な、なにか・・・？」

「い、いや、やっと終わりに近
づいたかなと思ったまでさ」

と言いながらも、大統領の顔は
少し微笑んでいるようです。



【おかあさんにきっと会えるよね？】

エイミーは輪の中で少しずつ光を弱めていくところの木に向かっ
ていいました。

「レタ、トナ、デコ、そしてお供の人たちもこれでお別れだね。名
残惜しいが、こっちにはやることが山ほどある。今すぐにでも取り
かからないとね・・・」

大統領は横と一緒にいるエイミーに目を向けながら、トナ、レタた
ちに向かってウィンクしていいました。

「あんまり活躍の場がなかったけどね」

デコはあまり歌を歌う機会がなかったことを悔やんでいるのか、少
し冗談ぽく言いました。

「本当は今度の7月4日の建国記念日に大会があったのだけど、こ
のゴタゴタで中止されてしまったんだ。だが今度は是非、わたしの
家で歌ってもらいたい。いっぱいフレンズを連れてね！」

「あ～～あ、おいらなんか、いつもこのバーバラに怒られてばっか
でさ、いいとこなかったなあ」

と、トミーは頭を少しかくしぐさをしながらいいました。

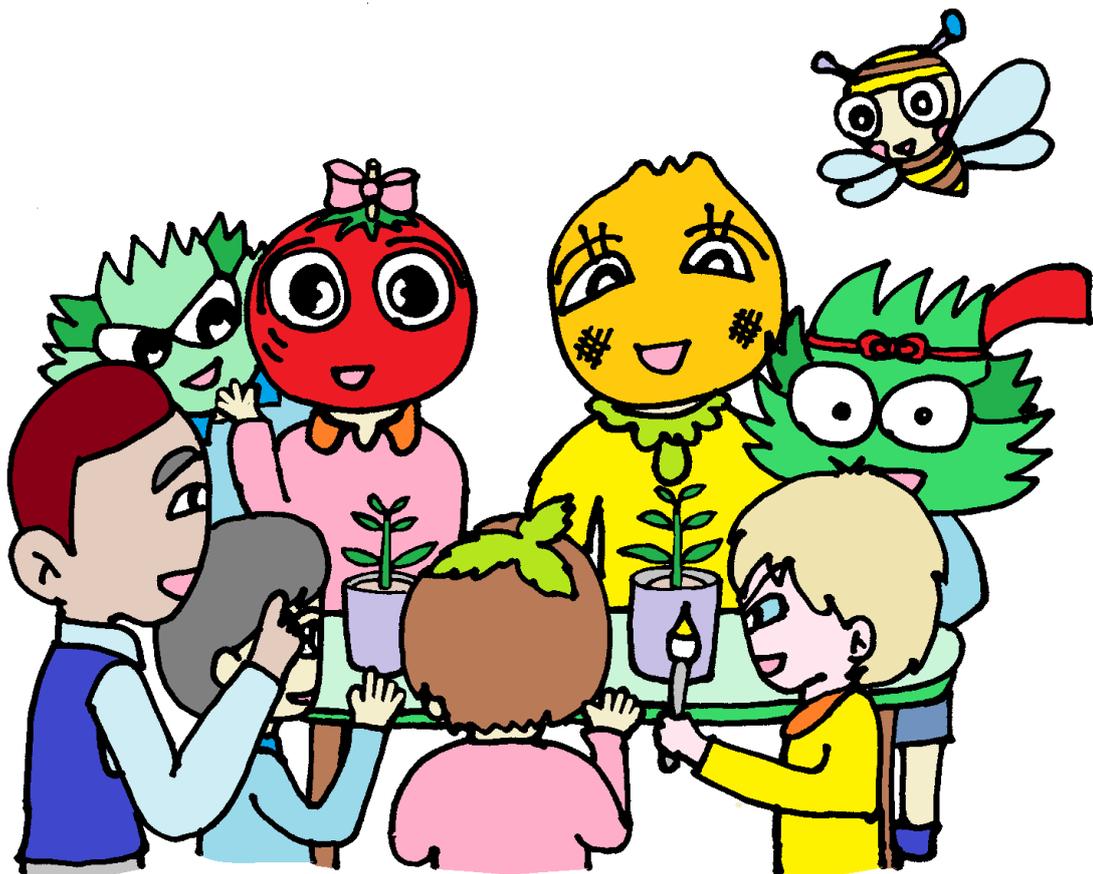
「ん、なことないわよ。トナさん、デコさんもいる中で唯一の男で
しょ。カッコよかったわよ」

バーバラはいつになくトミーを褒めてあげました。

「ほ、ほんと？」

トミーはますます頭をかいています。

『おいおい、男はこっちにもいるニ』



『ボクにゃんも男だにゃあ』

レタとクラウシアが笑いながらいいました。

「ここにもひとり、なっ！」

「だ、大統領・・・！」

そのタイミングにエイミーがおもわず笑ってしまいました。そしてしみじみと言いました

「それでもフレンズさんたちともうお別れなんてさみしいわね」

「いろいろな事があったわね」

バーバラもさみしそうです。トミーは少し涙ぐんで言いました。

「おいら、この本を生涯大事にして、一生懸命勉強するからね」



今までのいろいろなことが3人の頭の中に浮かんでは消えて行きます。



大統領以下特別な関係者は、マロン村の不思議な雑木林の前にいました。軍のヘリコプターもなくお忍びのお別れのときです。

「実際にわたしもこの中には行って、光る汽車に乗ってみたいものだな」

大統領はレタたちに握手を求めながらいいました。

『またいつか乗っていただくときがあるかもしれない二』

レタも握手に答えていいました。

「エイミーとバーバラとおいらだけがヒューマンで乗ったんだよね」

トミーは自慢げにいいました。

『これで安心してボクにゃんの住む世界に帰るにゃあ』

クラウシアがほっとしてつぶやきました。

「本当にみんな、パンツ、あっ、いや帽子を脱いだら、みちがえるようだ。またお会いしたいが、会った方がいいのか、会わない方が平和なのかな？」

大統領がいました。

『たとえ会うことがなくても、こころの木が残っているトナ。多くは力を出しつくして枯れてしまったけれど、少しの人が大切に育ててくれれば、きっとわたしたちのことを分かってもらえるトナ』

『今度は歌を歌いにくるポン』

『さ、ほんとうにお別れだニ』

レタが出発の合図をしました。



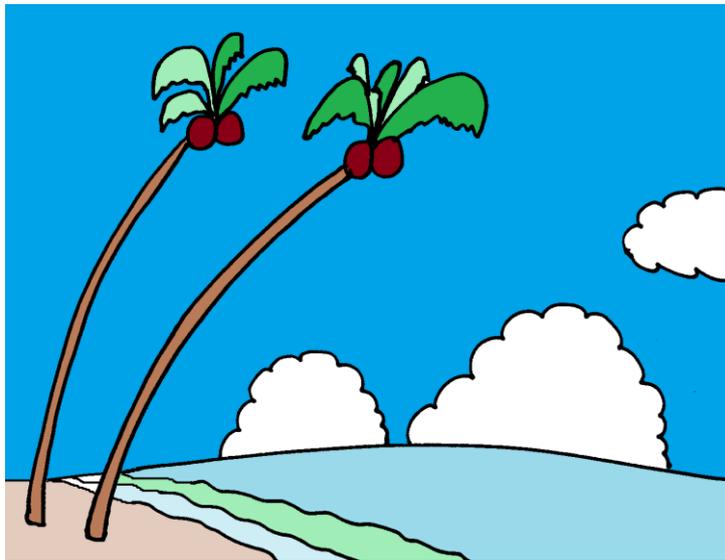
フレンズ

エピローグ



登場人物のその後が紹介されています。一体どうなったのでしょうか？

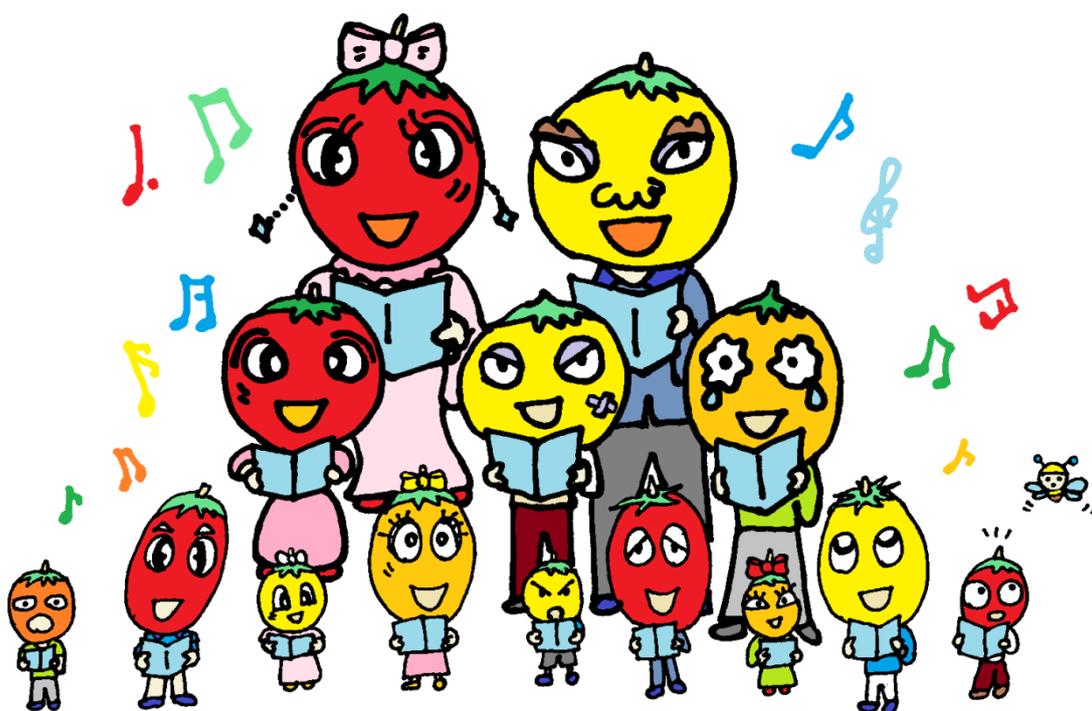
エピローグ



海に向かって走っていくよ

トナトン王国で祝いの宴

ヒューマニーワールドとつながる無限にも近い数の、マイクロ時空からの粒子の侵入は、フレンズワールドの重力を乱す限界値が下回り、トナトン王国での気象変動も収まったようです。すがすがしい初夏を迎えたこの日、トナトン王国では、王様がトナ王女や、一緒に活躍したデコ、レタ、クラウシアらを迎えての祝いの宴が催されました。トナトン合唱団が歌を歌って出迎えてくれました。



『さあさ、レタどの、いっぱい、いっぱい』

トナがヒューマニーワールドで覚えたもてなし方をやっています。

『おととと・・・トナどの・・・』

『ここにエイミたちも一緒にいたらよかったトナ？』

『さすがに今回はいないにゃあ』

クラウシアもあの赤いふんどしのボウシ？をかぶってご機嫌です。

『わたしはよく一緒に歌を歌ってるポン』



『どうやってトナ？』

『だってこころの木があるんだからね』

デコはそう言って笑っています。エイミーに教えてもらった七夕のお祝いをするよ。そう言って帽子だと思っているパンツを筐に飾っていきました。

『カナディ大統領からお歳暮が届いたトナ』

『あの縦しまの帽子もいいが、是非これをかぶって欲しいトナ』

トナはみんなに大統領から届いた帽子を見せました。トナにはエイミーのトマト畑のトマトをあしらい、デコにはナメリア合衆国のオレンジという果物の帽子をデザインしました。

『デザイン悪いにゃあ、レタ』

『そうそうオレッチはこの縦しまがいいだ二』

そう言って4人のフレンズは仲良くいっぱいやっていました。

‘えっ？なんでいっぱいやるかって？’

実はヒューマンワールドの野菜ジュースが大好きになったのです。
トマトとレタスとオレンジがミックスされたものです。

「えっ？フレンズでは食糧はいらなかったんじゃないやあって？」

そうです。食べる物はいらないのですが、水や栄養は別でしたよね。
フレンズワールドにはない素晴らしい栄養を見つけたようです。

「えっ、まだ何か？・・・サーヤとスカイブルー隊長がいないです
って？」

それはこのエピローグの別のところでわかりますよ。



いつものエイミー

「バア、トマトの花がたくさん咲いてきたね」

エイミーとアンおばあさんは、いつものように畑に出ています。

「ああ、おかげで今度は豊作だよ。エイミーの好きなトマトソースもいっぱい作ることができるよ。ところでその髪飾りは少し変わってるねえ？」

アンおばあさんは、今日はエイミーのいつもの三つ葉が少し違うことを発見しました。



「うん。三つ葉にあのこころの木の葉が、ひとつ付いたんだよ。でもまだクローバーじゃないよ」

エイミーは頭の飾りに手をあてて答えました。

「そうだねえ、その小さなころの木が大きくなって、その時、きっとお前の母親に会えることだろうよ」

「うん」

「さ、今日は市場へはいいから、弁当を持ってもうお行き」

「うん」

とって元気よく学校へ出かけていきます。

「おはよー、トミー」

「エイミー、ごめんごめん、まった？」

エイミーはいつもの道の曲がり角でトミーを待っていました。

「なんかいろいろあったけど。あつというまに過ぎていったね」

エイミーはトミーにいいました。

「ん・・・？あぁ、・・・、でもおもしろかったね。おいら少しは大人になった気がするよ」

そこへバーバラも合流しました。

「今日も時間通りに来たわね、めずらしく・・・ね、エイミー？」

トミーの方をみてバーバラがいいました。

「すこしは成長したのかしらね？」

エイミーも笑いながら3人は学校の門へ入って行きました。

悪徳科学者のエピソード

退院して元気になった軍需スパイはこころの木を、まだあきらめきれませんでした。

「どうしても成分検査をしようとするとうちが葉が消えちゃうな。どうすりゃいいんだ？」

一人の悪徳科学者がいいます。

「そうだ、いっそのこと食べちゃったらどうだろう？それでスーパーマンにでもなったらおれたちにはこわいものなしだぜ」

もう一人がとんでもないことをいいました。

「でも毒だったらどうしよう？」

「なあにだいじょうぶさ。ああやって子供のいうことを聞いて世界を救ったんだ。どうってことないさ。それよりもこいつでスーパーマンにでもなって世界征服でもしようぜ」

さらにけしかけます。

「そ、それもそうだな。ならお前から食べてみるよ」

「ああ、いいよ。おれが先にスーパーマンになっても悔しがらなよ」

そういつて食べるのをけしかけた悪徳科学者は葉もちぎらずに、こころの木を鉢ごと手に取ったかと思うと、その先の小さな葉を2、3枚、口の中に入れました。

【むしゃむしゃむしゃ・・・】

「おい、どうだいお味の方は・・・？いけるか？」



【むしゃむしゃむしゃ・・・】

「どうだい？」

お、おお～～～、力がみなぎってきたぞ」

「ほ、ほんとうか？」

「こ、これはすごい。まるで、・・・」

「ま、まるで、なんだ・・・？」

【ひっく、ひっく、ひっく・・・】

「おい、どうした？しゃっくりなんかして・・・」

【ひっく、ひっく、ひっく・・・】

「おい、だいじょうぶか？」

「ひっく、ひっく、ひっく、・・・しゃっくりがとまらない・・・」

「だから、いったらう？」

「・・・ひっく、と、トイレにいつてくる・・・ひっく」

その悪徳科学者は薬を食べ、しゃっくりがとまらないまま、下痢をしてしまいました。長い間トイレから出てきません。

「おい、だいじょうぶか？」

「も、もう少し待っててくれ・・・ひっく」

「待つのはいいが、もう1時間もトイレに入ってるぜ」



相棒はトイレから出られるように、急いで薬局にいった紙おむつを買ってきました。

「さあ、これでひとまずでられるだろう」

「そ、ひっく、そうだな・・・ひっく」

2人は2度とところの木に触れることはありませんでした。

アイムシュタイン 10次元脳業研究室では

「おお～～、たくさんトマトができちよるのお～～。いや、トマトとトナトンの合いの子じゃから、トマトナトンかいのお」

『そこそこ、デビルビーが逃げたわよ』

『よっしゃ、ここはオレに任せてっ』

レモンズ姉弟はこちらに残っています。そこでは、他のフレンズも一生懸命働いていました。

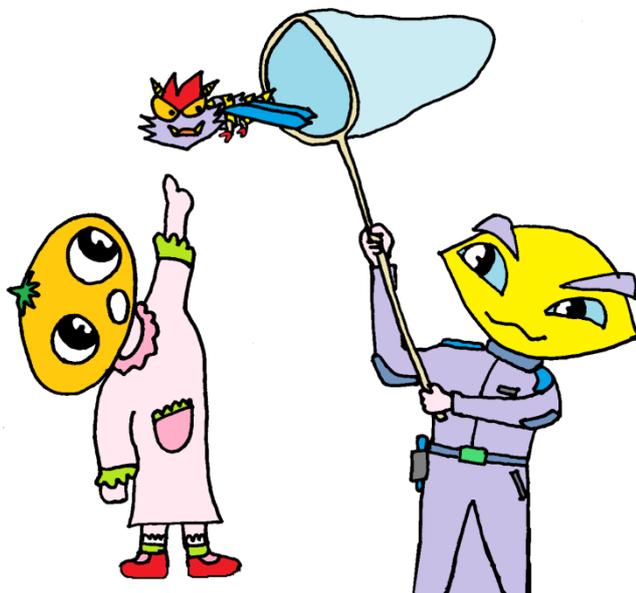
そこへ大きな風の音がして、温室の外を見ました。サーヤとビッグドラゴンフライが空から降りて来たのです。

【もうとどけたよ】

「おお、ありがとうサーヤ。ところでそちらのミツバチさんは誰かな？」

アイムシュタイン所長は、サーヤと一緒にいるミツバチのことを聞きました。

【これはピンク。ボクのおくさんだよ】



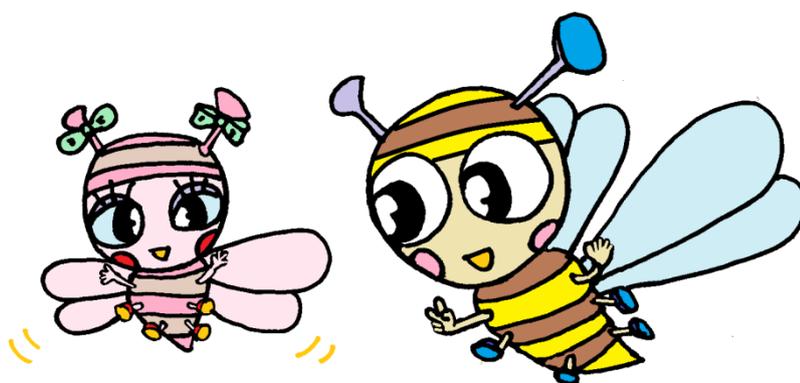
実はサーヤもヒューマニーワールドが気に入って、ヒューマニーワールドのミツバチを奥さんにしてしまいました。

【こっちもあいのこだね】

大きなビッグドラゴンフライがそういいました。アイムシュタイン10次元脳業研究所は、名実共に次元を超えた研究所になりました。

【今回は出番がなかったわね】

レモンズ姉弟はボディガードですね。陰でみんなを見守っていました。それがあなたたちの役割ですよ。



大丈夫、しっかり仕事をしてくれましたよ。

愛する夏の日

エイミーとアンおばあさんには新しい仕事が増えました。それはあの頭の良くなる帽子が大ヒットしてしまったからです。アイムシュタイン所長のところからスピリナンの苗をもらい、帽子に植えていきます。こうしてマロン村にはトマトのほかに名物が増えました。

エイミーは、7月の中旬の暑い夏の日です。1人で海の見える家から浜辺に出てきました。そしてやっと平和が戻った海に向かって、夏の歌を歌いました。



愛する夏の日 (Lovely Summer Day)

前奏 E C#m F#m B7

1



E F#m B7 E

うちよせる波の ささやき もう夏の朝

F#m B7 E E7

きみと とびらを あけて とびだす あつい夏

A G#m F#m G# m A F#m B B7

ボクのふねが あつい夏の 風おいかけ きみを呼ぶ

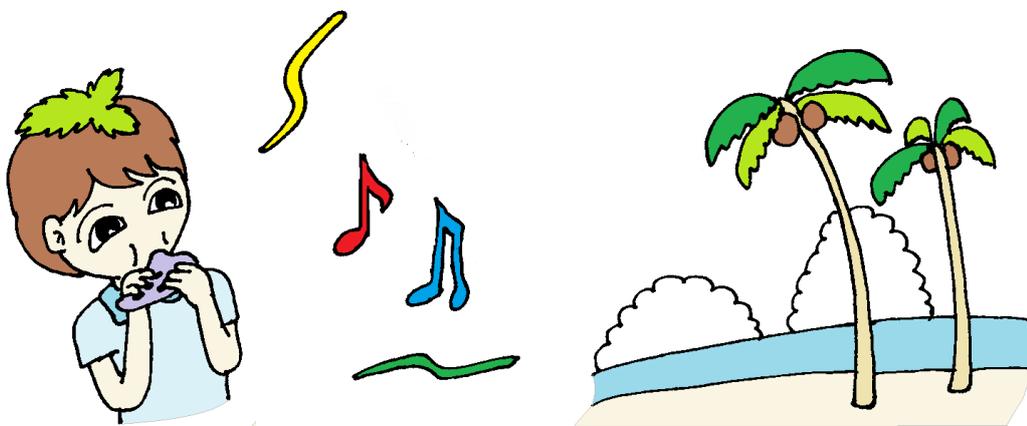
A E A E

夏は 今ここさ きみと二人いくよ

A Am G#m B7 E

ほら 白い風が きみの素顔 ささやいて

間奏 E C#m F#m B7



2

E F#m B7 E
うちかえず波の ざわめき ほら夏の朝

F#m B7 E E7
ボクも 波間を かきわけ つかむよ あつい夏

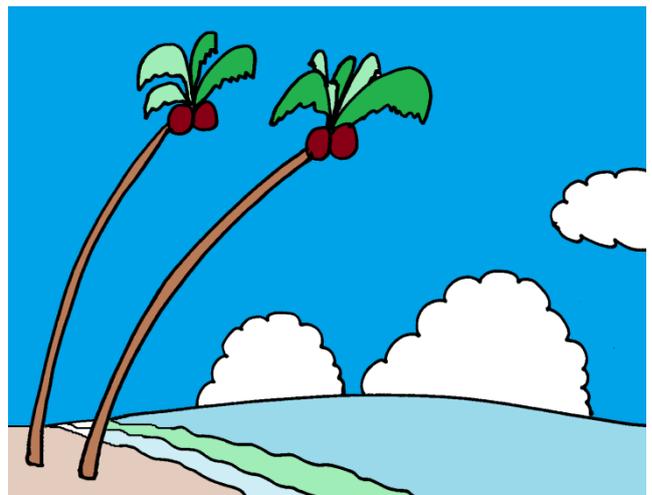
A G#m F#m G#m A F#m B B7
ボクのふねが あつい夏の 波をうけて きみを呼ぶ

A E A E
夏は 今ここさ きみと二人いるよ

A Am G#m B7 E
ほら 青い波が きみのこころ 押し寄せて

エンディング

E C#m F#m B7 Emai7



おわり (第2部につづくよ)